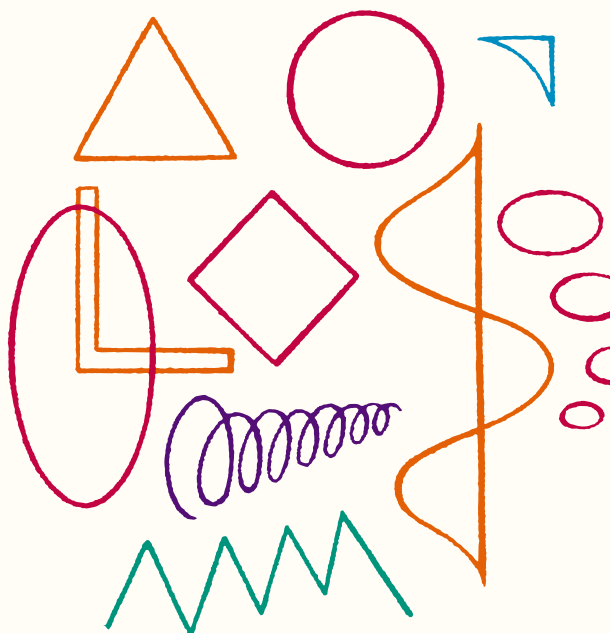


## 特集 コトバとつまあひ



ヒトとコトバとのかかわり 菊澤 律子  
音声言語の構音と身体環境の変化 野崎 一徳  
身体環境の変化と音声言語・手話言語 相良 啓子  
庭を読む、森を読む ピーター・J. マシウス  
声の楽器における機能性と呪術性 土佐 信道  
`きずな、と`かきね、としてのコトバ 小林 隆

目次

- 1 エッセイ 千字文  
言葉とは何か?  
星野 ルネ

特集  
コトバとつきあう

- 2 ヒトとコトバとのかかわり  
菊澤 律子
- 4 音声言語の構音と身体環境の変化  
野崎 一徳
- 5 身体環境の変化と  
音声言語・手話言語  
相良 啓子
- 6 庭を読む、森を読む  
ピーター J. マシウス
- 7 声の楽器における機能性と呪術性  
土佐 信道
- 8 “きずな”と“かきね”としてのコトバ  
——方言とヒトとのかかわり  
小林 隆

- 10 みんぱく回遊  
金魚のルーツを旅して  
新海 拓郎
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 ○○してみました世界のフィールド  
生涯でただ一度の映像撮影  
端 信行
- 16 コレクションあれこれ  
写真家と旅するインド  
三尾 稔
- 18 シネ倶楽部 M  
迷信と科学のはざまに生まれた  
魔性の女——「妖花アルラウネ」  
山中 由里子
- 20 ことばの迷い道  
甘い香りは「甘い」か  
三條西 堯水
- 21 編集後記・次号の予告

表紙

コトバの習得は、ヒトが生きる環境のなかで起こるできごと  
の経験、さまざまな面での認知能力の発達、そして身体動作  
の習熟の上に成り立つ(絵: fancomi)



作・画 星野ルネ

プロフィール

1984年カメルーン生まれ。漫画家&タレント。4歳のときに母の結婚に伴い来日し、兵庫県姫路市で育つ。高校卒業後、兵庫県内で就職したが自分の生い立ちが人びとの関心や共感を集めることを発見し、25歳で上京。タレント活動の傍ら、ツイッター上で発表していた自分の日常のエッセイ漫画が話題となり、『まんが』アフリカ少年が日本で育った結果』(毎日新聞出版、2018年)として出版。現在、毎日小学生新聞にて「アフリカ少年! 毎日が冒険」連載中。



# 特集 コトバとつきあう

ヒトは誰でも、生まれ育つ環境で使われているコトバを身につけ、それを使って暮らしてゆく、というイメージがあるのではないだろうか。実際には、ヒトとコトバとのかかわりは、そのスタートからさまざまであり、そして人生において遭遇する出来事によっては大きく変化する。コトバは多様であるが、そのコトバを話すヒトも多様であり、ひいてはヒトとコトバのかかわりも多様である。本特集ではその一端を紹介してみたい。



特別展

Homō loquēns 「しゃべるヒト」  
——ことばの不思議を科学する

会期：2022年9月1日(木)～11月23日(水・祝)  
場所：特別展示館

## ヒトとコトバとのかかわり

菊澤 律子 きくさわ りつこ  
民博 人類基礎理論研究部

「言語」というときには、なんとなく、何か「完成形」、もしくは「正しい形」があるように感じられるかもしれない。実際には、個人個人が使うコトバはさまざまで、語彙も文法も、少しずつ異なっている。会話は、「えっ?」「それ何?」と聞いて、相手が発した語の意味や意図を確認しながら進む。聞き返しをしているという認識は、話者は通常もっておらず、それくらい、ひとりひとりが話すコトバは違っている。

「完成形」が話せて聞けて、読めて書けることを前提として社会が成り立っていると、コトバの使用に制約がある人たちが情報を受信し発信することができず、取り残されてしまう。言語の使用が自由にならない人たちも声をもっている。一方で、今、言語を自由に使えていても、その状態が永遠に続くとは限らない。そんな視点から、秋の特別展では、「言語ヒストリー」という概念を提唱してみた。

### ヒトの状態の多様性とコトバ

ヒトの身体とコトバの関係を理解するには、スピーチ・チェーン(図1)を参考にするとわかりやう。これは、話し手の脳で生まれた考えが受け手の脳に伝わるまでのプロセスを模式化したものだ。話し手の脳に伝えたいことが生まれると、それを発信するために構音器官に指令が出る。構音器官は、音声言語の場合には声帯から口腔を経て唇までの部分で、ほとんどが身体の内側だ。手話言語の場合には、顔や上体と上肢全体で、外から見える部分になる。いずれの場合にも、音もしく

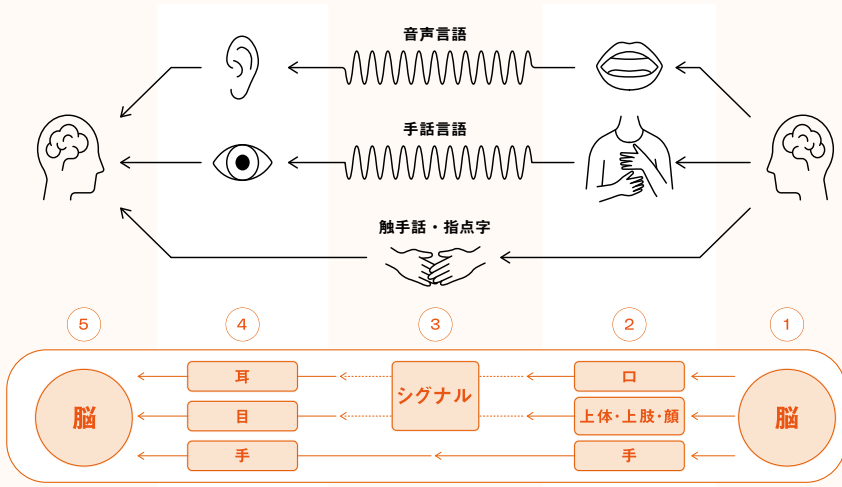


図1: スピーチ・チェーン



工夫して想いを伝える。——出版の可能性について打ち合せをする詩人堀江穂子さん。脳性麻痺があり発声ができないため、筆談により考えを伝える(東京、2022年)

は視覚シグナルが、空間を伝わって受け手の受容器官—耳や目—to届き、脳での言語処理を経ることで「伝わる」。この簡略図からだけでも、コトバが伝わるためには、何段階ものプロセスがあるのがわかる。このプロセスのなかのひとつが作動しないとコトバでの意思疎通が難しくなる。例えば、脳が正常に機能していても、身体の構音にかかわる器官(図1の②の部分)が作動しなければ、そこで発信は途切れてしまふ。その例としては、脳性麻痺(生後すぐを含む先天的要因による)や失語症(後天的)がある。前者の場合には、生後から周囲の人たちとのコミュニケーションをどうとるかに工夫が必要になる。一方、後者の場合には、一度獲得し、失つ

### これからのコトバへの視点

ここでは、コトバとヒトの基礎的・身体的な関係について述べたが、コトバはヒトの暮らしのあらゆる場面にかかわっている。ヒトの数だけコトバがあり、コミュニケーションの数だけコトバがある。そしてコトバの方にも、音声言語あり、手話言語あり、さらにそれぞれのなかにもさまざまな方言や変種がある。ものの見方、感じ方は人それぞれなので、「言語ヒストリー」をどんどん広げてゆくと、人間として、つきあうあらゆるものとのかわりも含まれてくるかもしれない。ヒト以外のものにコトバと通じるものを感じて言語化する。あるいは、人工物の制作をとおしてコトバとの関係を再構築してもいい。案外、そんなところからこれからの社会におけるコトバのありかたのヒントが得られるのかもしれない。



# 音声言語の構音と身体環境の変化

野崎 一徳

大阪大学歯学部附属病院准教授

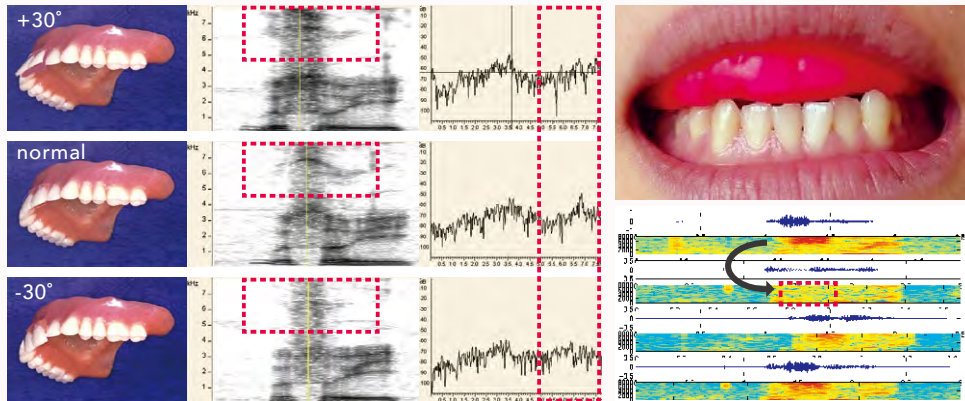


図1: マウスピースと入れ歯の装着による音声の特徴の変化  
右: スポーツ外傷予防用マウスピース装着後すぐに、「うすいみそしる」と発音を繰り返したときのサウンドスペクトログラム。初回と2回目では明らかに「す」が異なることがわかる。2回目では消えた「す」が3回目ではあらわれていた  
左: 入れ歯の装着により「す」の高周波成分に変化が生じ、前歯の歯軸角度を変えるとその程度が変わる

普段はそれが当たり前になってきているため、ヒトに特異な機能であるはずの構音について深く考えたことはないかもしれない。音声言語の場合には、構音は口全体を動かし、コトバを発する行為だ。スポーツ用のマウスピースを装着し話してみても違和感を覚えたことはないだろうか。

口の中を強く意識する機会のひとつとして歯科医院受診があるだろう。歯が失われた部分を補うため、古来より口腔内への補綴物（入れ歯など）の装着がおこなわれてきた。入れ歯の装着により話しにくくなったと訴える患者さんがいる。その装着により声道の形状に影響が生じ、声の特徴が変化したからだと考えられる。音声はヒトの身体的特徴を反映するものであるが、入れ歯によってその特徴が変わってしまう。

ヒトの構音を出生から老年期まで辿ってみると、まず口の中で顎の成長に伴って乳歯の萌出から永久歯への生え変わりが起こり、六歳ごろには会話に必要なすべての音を出すことができるようになる。まれに学童期から青年期にかけて、上下の顎の成長の問題が生じ、声道の形状に影響をおよぼす歯科矯正がおこなわれることがある。先天性疾患である口蓋裂患者さんは、生後しばらくして言語獲得に支障をきたさないように口蓋を閉鎖する

手術をおこなう。言語聴覚士が言語獲得過程を見守り、上顎の成長に問題が生じた場合には青年期に二回目の手術をおこなう。  
壮年期後半から老年期にかけては、舌癌などの発生率が高まり、患者さんには手術や放射線治療、化学療法などがおこなわれる。舌の一部もしくは全部を摘出した場合、術後に構音障害が生じることがあり、リハビリテーションが必要となる。

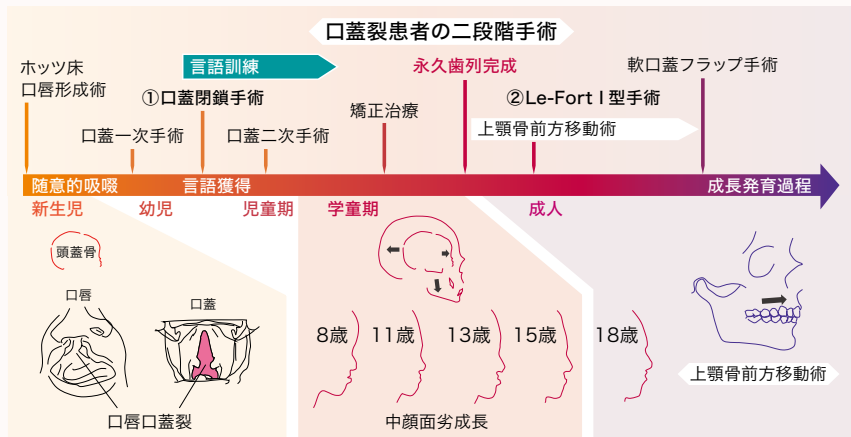


図2: 口蓋裂の加療の流れ  
口蓋裂の患者さんが、生まれたときから成人となるまでに受ける治療内容の詳細。大きな手術は基本的に2回あり、1回目は言語獲得のため、2回目はかみ合わせや構音機能のためにおこなわれる。そのあいだ、頭蓋骨（上顎骨）と下顎骨の成長発育を注意深く観察する必要がある

# 身体環境の変化と音声言語・手話言語

相良 啓子

人間文化研究機構 人間文化研究創発センター

聴覚障害には、生まれつき耳が聞こえない先天性と、人生の途中で聴覚に障害をもつ後天性のものがある。

中途失聴者の後天性といっても、少しずつ聞こえなくなっていくケースや突然聴覚が使えなくなるケースなどさまざまである。それまでは音声言語を使って生活していたが、ある時点から次第に

あるいは突然、音声言語でコトバを交わすことができなくなる。中途失聴者の多くは、相手の口の形を読みとる読唇をすることは難しく、すぐに手話を習得することも難しい。手話を習得する機会があっても、最初は、ひとつひとつの手話単語を覚え、日本語に合わせて表現する日本語対応手話を習得するケースが多い。

わたしは成人になってから突然両耳の聴力を失った。手話を覚え始めたばかりのときは、日本語対応手話を使っていたが、時が経つにつれてろう者との交流が盛んになると、自らの表現も変わっていき、日本語とは異なる文法をもつ日本手話を使うようになっていった。

日常的に手話を使って生活する先天性ろう者が、人生の途中で目に障害が起るとどうなるだろうか。それまでと同じ手話

を使ったコミュニケーションが難しくなり、手話とのつきあい方は視力の程度に左右される。例えば、まったく目が見えないというのではなく、限られた視界だけが見えるような場合には、手話全体が視界に入るようにしてはならない。うつすらと見える弱視状態であれば、よりはっきり見える位置を確認し適切な位置で手話をしなければならぬ。目がまったく見えなくなった場合には、手を触れて理解するコミュニケーション方法が必要となり、触手話という方法をとり入れることになる。

他に、病気や事故が原因で、以前と同じように手話を流暢に使えなくなったという手話話者もいる。例えば、脳梗塞が原因で、片側が麻痺になり、非利き手のみで手話をせざるを得ない状況になってしまったケースがある。手話の語彙には、左右の手の形や動きが同じものもあれば、左右の手の形が異なり、利き手の動きが、その語の意味の認識に重要な語もある。そのため、片手だけの手話になると、相手に言いたいことを十分に伝えるのが難しくなることが起こる。しかし、そのときは、片手だけで表現可能な指文字に変更すれば相手に伝わるようになり、話者の手話に慣れた手話話者を通訳に当てることで、コトバを交わすことが可能になる。

聴覚障害者の身体変化とコトバの関係性は、実に多様である。明らかにいえることは、身体変化によってそれまでと同じ方法によるコトバが使えなくなっても、ヒトは、なおもコトバを交わすために、それまでとは異なる新しい方法を常に習得していく力を備えているということである。



上: 盲ろうの森敦史さんに触手話で話す筆者  
下: 手話で話す森敦史さんとそれを見て理解する筆者(どちらも東京都、2022年)







# 「きぎずな」と「かきね」としての「ロトバ」 方言とヒトとのかわり

小林 隆こばやし たかし  
東北大学大学院教授

言語をとおした周辺とのかわりというところ、すぐに頭に浮かぶのは東日本大震災のことである。わたしの研究室では、学生たちとさまざまな被災地支援の取り組みをおこなった。そこで見えてきたのは、方言が人びとの心を癒し、互いを励ます「きぎずな」の役割を果たしていたということである。遠方に避難した被災者は、ふるさとに残った人たちとの方言による電話に安らぎを覚えた。地域の復興を鼓舞するスローガンは、「がんばろう」より「がんばっぺ」が好まれた。つまり、震災とのかかわりのなかで、方言は単なる「言葉」以上の存在になってきた。効率化、グローバル化の流れのなかで、実用言語としての共通語が広まったが、被災地の人びとにとって、共通語は心に届く言葉にはなれなかった。その使命は方言に委ねられたのである。

## かきねを作る方言

しかし、方言は言葉である以上、コミュニケーションの道具でなければならぬ。意志疎通の媒体としての方言は、被災地では少なからず問題になることもあった。それは、被災地の外から駆け

つけた支援者が、被災者の方言を理解できず、コミュニケーションの妨げになったという事態である。例えば、東京からの行政支援者は、「ズーゾー弁で地名の発音が理解できず、困った」という経験を話してくれた。また、広島からのボランティアは、がれき撤去の折、「テレビ、投げてけろ」と言われたが、「投げる」が「捨てる」の意味とは知らず、とまどったという体験を聞かせてくれた。地域コミュニケーションの内側では心をつなぐ「きぎずな」となる方言が、その外側の人びととのあいだには意志疎通を阻む「かきね」となる姿が浮かび上がったのである。

そうした実態を、被災地のひとつである宮城県気仙沼市で学生たちと調べて回った。そして、どういふ言葉の特徴が支援者にわかりづらいのか、リストアップした。それをもとに作成したパンフレットが、『支援者のための気仙沼方言入門』である。B4版四面印刷のコンパクトなものだが、必要最小限、これだけ知っていれば会話に困らないといった情報を盛り込んだ。ボランティアセンターや避難所、宿泊施設などに配布したが、一定の効果はあったようだ。

## ものの言い方のギャップ

ところで、このパンフレットに盛り込まなかった内容に、ものの言い方、あるいは、話しぶりといった面にかかわることがある。発音や単語のことは掲載できたが、ものの言い方の特徴についてはまとめ方が難しく、掲載を断念した。それは、やはり支援者の体験に基づくものである。

横浜出身の介護士が言っていた。「避難所で活動しているが、こちらが『おはようございませう』と声をかけても、地元の人には『おはよう』と返してくれない。ずいぶん違う土地に来たんだなと思った」。また、新潟から来た保健師の体験は次のようである。「避難所の一室で住民の血圧測定をしていると、『けつあつー！』と大きな声で言いながら入ってくる男性がいた。用件わかっているでしょ、といった感じで」。あいさつをしない、ぶっきらぼうに話す、そんなマイナスの印象を受けたようである。

こうしたものの言い方にかかわることがらは、その人の個性の問題と思われてしまいがちだ。しかし、これは方言の地域差の問題でもある。例えば、商店に入るとき呼びかけを調査してみると、東北地方には「買うー！」「という言い方（図1の「買オウ系」）があり、用件そのものをずばりと述べるのは「けつあつー！」と同じ発想とみなしてよい。「入るぞ」「くれ」なども含めて、東北の表現はかなり直接的である。すなわち、ものの言い方には

地域差があり、それがコミュニケーションギャップを生み出す原因になっている可能性が考えられるのである。被災地である東北地方は仲間内社会という性格が強く、あえて他人行儀なあいさつなど交わす必要がない。直接的な言い方をしても、用が足りれば済むという面もある。そうした社会的背景を理解せずに、言葉遣いのみを取り上げると、とんでもない誤解を招いてしまう恐れがある。

方言は住民の日常的な言語であり、地域の暮らしの言葉でもある。だからこそ、東日本大震災という大災害は、その使い手と他者とのかわりが見せるさまざまな側面を浮き彫りにしたといえよう。

- |          |           |
|----------|-----------|
| 存在確認類    | 許可要求類     |
| ∟ 居ルカ系   | ・ 御免クダサイ系 |
| 意志表明類    | 符丁表現類     |
| ◎ 入ルゾ系   | — コンニチワ系  |
| ◀ チャーピラ系 | ✕ マイド系    |
| ● 買オウ系   | 呼びかけ類     |
| 販売要求類    | ∨ 申シ系     |
| ▲ 売ッテクレ系 | ↑ 掛け声系    |
| ▷ クレ系    |           |
- ※その他、無回答は表示しない。

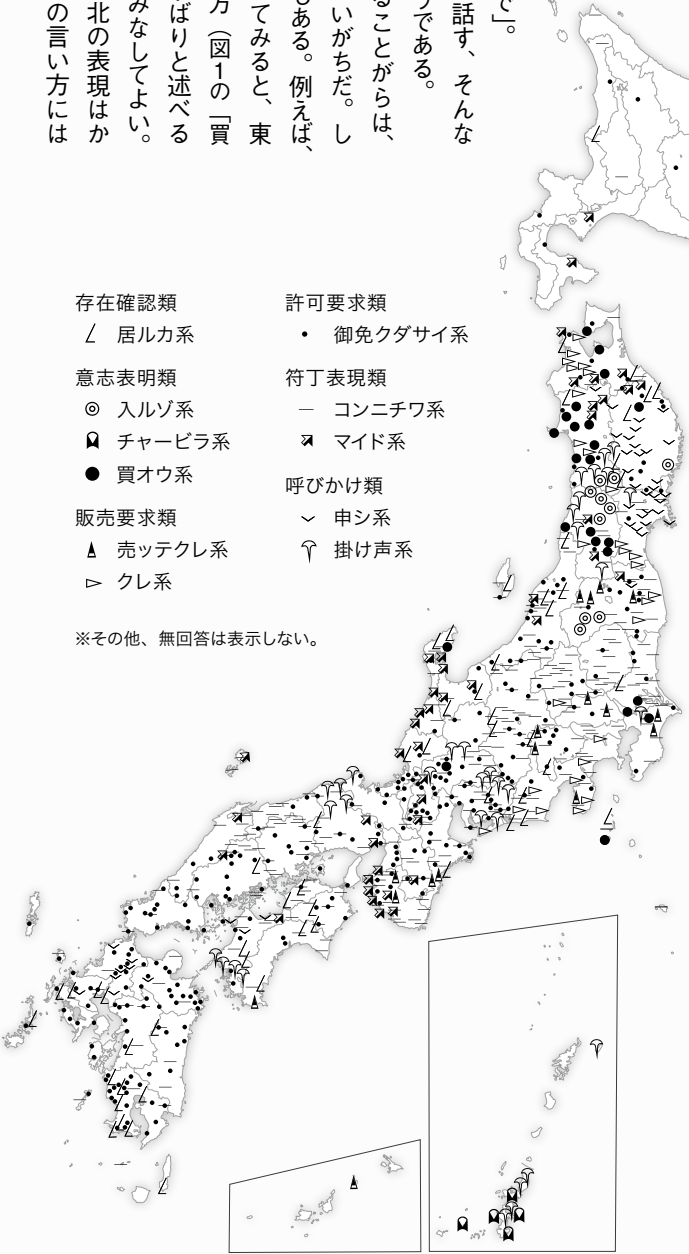


図1：「商店に入るとき呼びかけ」の全国方言分布（東北大学、2002年調査）



コミュニケーションギャップの聞き取り調査。気仙沼市ボランティアセンターにて（気仙沼市、2011年）



方言パンフレット「支援者のための気仙沼方言入門」（東北大学、2011年作成）



右上：方言スローガンの一例。仙台市街中のアーケード内にて（仙台市、2011年）  
左上・下：気仙沼市役所にて（気仙沼市、2011年）



金魚がいつ、どこで、何から生まれたのか、と聞かれたら答えられる方は少ないだろう。けれども、読者のなかで金魚を見たことがないという方はいないと思う。きつと誰しもが日常の一ページで金魚を見たことがあるのではないだろうか。それは、緑日の金魚すくい、ホームセンターのペットコーナー、はたまた誰かの家の水槽かもしれない。

### みんなくのなかの金魚

みんなくの展示資料・収蔵資料のなかにも金魚はいくつかある。ここでは金魚の尻尾と金魚ねぶたを取り上げた。

「中国地域の文化展示場」を訪れたら、天井を仰ぎ見てもらいたい。生き物を意匠としたさまざまな凧が目に飛び込んでくるだろう。そのなかに金魚が描かれた凧もある。図柄から想像するに、品種は水泡眼であると思われる。また、春節（旧正月）の飾りに金魚の図案はよく描かれる。中国では金魚は金運をもたらす吉祥のシンボルとして認知されている。それは中国語で金魚の発音「jīnyú」（お金が残る）と同じであることに由来する。このように、金魚のイメージは中国では日本とは大きく異なっている。

青森市は毎年八月になるとねぶた祭で活気づく。金魚ねぶたが街中の軒先に吊り下げられ、祭りのムードを盛り上げる。青森

### 金魚のはじまり

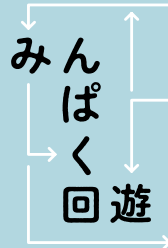
金魚の起源は、三世紀ごろの中国南部で見つかった野生の赤いフナである。それを人間が長い時間をかけて品種改良してできたのが金魚である。

では、野生のフナとはいったいどのような魚なのであろうか。人間にとってもかかわりの深い魚である。フナは日本のほかユーラシア大陸に広く分布する。フナやメダカ、ドジョウなどは水田稲作に高度に適応してきた魚である。

水田には思いのほか多くの魚が生息している。稲作の合間に魚をとるなど、漁撈活動の場としても機能している。現在の日本で水田漁撈はほとんど見られなくなってしまうが、世界にはまだ水田漁撈の文化が残っている。魚伏せ籠や釜は代表的な漁具である。

このような漁撈活動のなかで、偶然、突然変異で赤くなったフナを見つけた。めずらしいもの好きの中国人が飼い始めたのだらう。

歴史は下り、一〇世紀ごろになると、富裕層のあいだで



## 金魚のルーツを旅して

新海 拓郎  
総合研究大学院大学博士後期課程

中国地域の文化展示  
「工芸」

東南アジア展示  
「生業」



B 水田や河川での漁撈の道具 (H0000315など)



観覧券売場  
本館展示場



A 金魚の凧  
(中国、H0230049)

水泡眼

金魚ねぶた  
(日本、青森県、H0036214)

Hからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

（津軽地方）は金魚とゆかりのある土地である。江戸時代、京都から持ち帰った金魚がお殿様に献上されたという記録がある。その後も武士のあいだで継続的に飼育され続けていた。そのなかで生まれたのが青森のご当地品種である津軽錦である。金魚ねぶたはこの津軽錦をモデルとして作られているともいわれている。



華麗に泳ぐ金魚たち(2018年)

飼育されていたようである。明代（一三六八～一六四四年）にはさまざまな品種が産み出されていた。

日本に金魚が初めてやってきたのは室町時代とされる。文亀二（一五〇二）年に中国から泉州（現在の大阪）に伝来したという記録が残っている。江戸時代中期になるとようやく庶民のあいだにも金魚は広く浸透する。寛延元（一七四八）年には金魚の飼育指南書『金魚養玩草』が大ヒットする。

浮世絵の題材としても金魚は多く描かれている。こうして日本文化のなかに金魚は浸透していった。

### 金魚のいま・みらい

金魚の有名な産地には、埼玉県北部地域、東京都江戸川区、愛知県名古屋市周辺、奈良県大和郡山形市、熊本県長洲町などが挙げられる。これらの地域では田んぼを改良した金魚池などで養殖がおこなわれている。金魚池が一面に広がる様子は金魚の産地ならではの風景である。いずれの産地でも都市化の影響や高齢化によって生産者の数は減少の傾向にある。しかし、日本文化に浸透した金魚の養殖が完全になくなってしまうことはないだろう。

みなさんも展示場で気になった生き物について深掘りする旅に出てみてはいかがだろうか。新しい発見に出会えるかもしれない。







# 生涯でただ一度の映像撮影

端信行  
民博名誉教授



映像作品の監督になってみました

## 映画全盛期の少年時代

わたしが少年時代をおくった一九五〇年代は映画全盛期だった。相撲や野球といった遊び以外では、映画を観るのがいちばんの娯楽であった。高校の入学試験で、自由作文の課題では、ジェームス・ディーン主演の「理由なき反抗」評を書いたことだった。

当然ながら、個人で撮影を楽しむための八ミリ映写機も大流行していた。学生時代に、アフリカ研究会の場で、当時、京都市立芸術大学におられた木村重信教授が自ら撮影された「サハラの先史壁画」の八ミリ映像を上映されたのを今も鮮明に覚えている。

ちょうどそのころ、今西錦司先生を隊長としたアフリカ調査隊に参加する機会を得たが、この調査隊はテレビ上映を目的としたプロの映画班を帯同し「ジャンボ・アフリカ」を制作した。撮

影現場では、しばしば、アシスタントとして手伝ったのはいうまでもない。ふりかえってみると、少年時代からけっこう映画やドキュメンタリー映像と身ごかに触れ合ってきたが、当時は自分がカメラをまわすことは考えたこともなかった。

## 「王の祭り」と王位継承

一九七七年に民博が開館し、翌年からアフリカ調査が始まった。このときから、わたしはカメルーン北西部、バメンダ高地の酋長制社会の住み込み調査を始めた。バメンダ高地には、大小さまざまな規模の酋長制社会が数多くあり、わたしが住み込んだのはマンコンという、人口二〇万ぐらの中規模といつてよい酋長制社会であった。

人類学では酋長制というが、ひらたくいうと酋長は王である。この地方の王はカミなる王として、さまざまなタ

ブーをまとっている。一般の人は王に直接触れてはならないし、玉座とか王の使用物にも触れてはならない。また王に話しかけるときは息をかけてはいけない（手のひらで口を覆う）など日常的な細かなマナーがたくさんある。また王は呪術医の元締めであり、彼らを通じて領地を守る薬を隣国に通じる道路上や住民の屋敷地に散布する。また住民の土地争いの調停などは、王宮の仮面が闇夜に王の神器の槍を境界となる箇所突き立てて争いを裁くという。とにかく人びとの生活の細かいヒ



祖先の埋葬石標。赤い粉は王が語ったしるし(1978年、X0019206)

ダのなかに王の存在がすり込まれている。

このような王は、原則として、男系の末子相続で継承される。王の死に際して、選ばれた皇子が呼び込まれ、唾液による秘儀によって神性が伝授されるという。こうした秘儀は王宮の仮面が執りおこない、彼らの先導によって新王が人びとの前にあらわれる。一般の人びとと違って、王の葬儀はおこなわれない。神性は不滅なのである。

このような性格をもつ王が、数年に一度、すべての住民とともに踊る行事があるという。マンコン語を直訳すると、「王の踊り」となるが、日本語では意味

を正確に伝えないので「王の祭り」とした。八二年の調査のとき、はじめてこの行事を観察することができた。このときは行事を後から追っかけるばかりであったが、行事のあり方を追っているうちに、この行事は、マンコンの人び

とにとつては、日常の暮らしのなかでカミなる王と、ともに踊るかけがえのない場であり、この行事こそはマンコン王制をささえる要であることがわかり、この行事はなんとしても映像記録に残すべきではないかとの思いが強くなった。

## 映像撮影あれこれ

この「王の祭り」を撮る難点は、あらかじめその年におこなわれるかどうかかわからない点であった。王は毎年、時節的には年末のころ（乾季の真つ最中に、先祖詣りをする。そして先祖供養の儀礼のなかで先祖と語り、先祖の声から王の祭りを開催する許しが出る、それを人びとに王宮の仮面をとおして告知する。ここではじめて「王の祭り」が動き出すのである。

満を持して八七年に博物館のビデオカメラを持参した。幸いなことにその年は「王の祭り」がおこなわれた。八二年に一度観ているので、流れを追う苦労はなかった。次の場面が次つぎと浮

かんてくるので、四日間にわたって先ききと移動しながらほぼ全体像をとらえることができた。その点はよかったが、わたしは一人で撮影したので、何力所かで、もう一人カメラマンがいると、対面が撮れるのもつとよかったのではと思われた。

その翌年に再訪したとき、あら編集した記録映像を持参して王に献上したが、帰国の挨拶に訪れると、王はすでにご覧になったようで、満足の表情でお礼を述べられた。

その後、なかなかまとまった時間がとれず、二〇二〇年、ようやく作品（ビデオテープ番組一七五七・七二四九「王の祭り」）としての完成を見た。関係者の皆さんに心よりお礼申し上げる。



- 1: 玉座の王 (1982年、X0021637)
- 2: 祖先詣りから王宮にもどる王とその一行 (1987年、X0023092)
- 3: ムソンゴン結社のみそぎ儀礼 (1987年、X0023101)
- 4: 村の女性たちはそりの衣装で参加 (1982年、X0021440)



# 写真家と旅するインド

三尾 稔 みおみのる 民博 グローバル現象研究部



ジャイナ教の女性修行者と語り合う沖氏。自身が写る写真はまれである  
(撮影者不詳、インド・ラージャスターン州、1990年、X0303357) Photo by F.M.Oki

## 沖守弘インド写真

写真資料件数：館内公開22,120件(内インターネット公開21,971件)  
写真家沖守弘氏が1977年から1996年のあいだに南アジアに赴き、インドやネパール各地の祭礼・芸能・工芸などをテーマに撮影した写真コレクション。日本からの訪問者が限られていた時期の写真や、今でもアクセスが難しい地域の写真も多数含まれる。2013年に民博に受け入れ。  
<https://htq.minpaku.ac.jp/databases/moindia/japanese/>



女神祭礼用の神像に眼を描きこむ職人。神像作りにかかる情熱がほとばしる  
(撮影：沖守弘、インド・西ベンガル州コルカタ、1980年ごろ、X0308305)  
Photo by F.M.Oki

インド東部で挙行される山車の巡行祭。  
『季刊民族学』の特集でも反響をよんだ  
(撮影：沖守弘、インド・オディシャ州プリー、  
1980年ごろ、X0300881) Photo by F.M.Oki



マザー・テレサの肖像やインドの祭礼・芸能・工芸を活写した作品で知られる写真家、沖守弘氏に親しく接する機会を得たのは、氏が晩年を迎えてからだ。

それまでも氏の写真を目にする機会があった。筆者が駆け出しのころに文章を寄せたある展示関連書にインド先住民の儀礼の写真を提供していたのも沖氏だった。氏の写真と解説が特集された数編の『季刊民族学』も興味深く読んでい

介されていない儀礼や芸能の写真が多数あることは明らかだった。インドの情報を充実させ公開するため、民博に全点を受け入れ、写真データベースを作成したいとお伝えすると、氏は快く同意してくださった。その後手続きを経て、氏の思い入れが強いマザー・テレサの写真を除くインドおよびネパールで撮影された写真すべてが翌年民博に寄贈された。また取材の準備に使った文献や資料、取材メモ、関係者への書簡などもアーカイ

た。また福岡アジア美術館で二〇二二年に開催された特別展「魅せられて、インド。」に展示された氏の写真作品には、こちらが魅せられる思いで見入ったものだった。

## 写真コレクションとアーカイブの受け入れ

この展示のあと同美術館の学芸員から、沖氏が写真コレクションを一括して寄贈できる博物館を探していることを聞かされた。この方は民博と縁

ブ資料として同時に民博に寄贈いただいた。これらの資料は「沖守弘インド民族文化資料アーカイブ」として民博におさめられている。

## 二人三脚によるデータベース作り

沖氏のインド取材は一九七七年から九六年まで二〇年間にわたり、七〇回あまりの渡印で撮影された写真資料は二万点あまりにのぼる。データベースはその一点一点にできるだけ詳しい情報をつけ公開することをめざした。

写真資料は大まかな時系列に整理されていたが、沖氏自身も詳細な撮影年月日や場所を記録してはいなかった。そこでまず、残された取材メモや資料、地図などを手がかりに撮影期間と場所を推定した。保管されていたパスポートに記録された出入国日と場所、残されたメモと撮影した祭礼を突き合わせ、時系列を確かめる作業もおこなった。祭礼は各地の独自の暦に従って挙行されるため、沖氏がある祭礼を何年ごろ撮影したかわかると、暦と照合すれば逆に正確な撮影期間と場所が推定できるのである。撮影後早い段階でスライドが作られることが多かったため、マウントに打刻されたスライド作成年月の情報も役立つ。

この作業にご本人への聞き取りが決定的に重要だったことはいうまでもない。自宅にも何度もお邪魔し、民博で一週間集中的に聞き取りをしたこともある。自ら四駆を運転して広大なインドを回り、ときには四駆に泊まりながら撮影をしたこと、険しい山地にガイドと挑んだ



先住民ラトワの神話壁画。沖氏は壁画の更新儀礼の一部始終を撮影している  
(撮影：沖守弘、インド・グジャラート州、1990年ごろ、X0306683)  
Photo by F.M.Oki

ことなど、さまざまなエピソードを豪放磊落に語ってください、時を忘れて聞き入ったことは懐かしい思い出である。一期一会となる祭礼の取材を無駄にしないため、テーマを決めたら文献調査を重ね、事前に現地入りしてアングルを工夫するなど周到な準備を重ねて撮影に臨んでいたことも聞き取りを通じてよくわかった。

## 取材旅行の追体験

これと並行して写真に写っている情報を一点ごとに整理した。テーマが広範なため、民博内外の研究者の協力を仰ぎ、少しずつ進めた。根気のある作業を進めていると、沖氏とともに一歩一歩インドを旅して回っているような不思議な感情がわくこともあった。進捗が遅い！と沖氏から叱咤されることもあったが、受け入れの二年半後の二〇一六年には何とか公開できた。沖氏はこれを見届けるようにして、その二年後に惜しくも他界された。

沖氏の情熱と周到さに裏打ちされた貴重な写真の数々にデータベースを通じて接していただければ幸いである。



# 迷信と科学のはざまに 生まれた魔性の女

山中 由里子 民博人類文明誌研究部

として、別の植物の根を人の形に細工した偽のマンドラゴラも中世から一九世紀ごろにいたるまでヨーロッパや中東で根強く出回った。この作品では主人公の名前がアルラウネであり、彼女の謎めいた出自にこの妖しい根がからんでいる。

## マッドサイエンティストと ファムファタール

映画にはまず動物の人工授精実験にたずさわる科学者テン・ブリンケン博士が登場する。博士の珍物コレクションにあったマンドラゴラに想を得た博士の甥は、動物実験を人間にも応用できないかと提案する。ドイツ語で別名「ガルゲンメンライン」(絞首台の小さい人)というように、マンドラゴラは死刑囚から流れた精液が大地で受精し生えてくるという伝承がヨーロッパでは流布していた。博士はその迷信と科学を融合させ、絞首刑に処せられた殺人犯の精子を娼婦に人工授精させるという実験を思い付いたのである。こうして生まれてきた娘はアルラウネと名付けられ、両親を殺人や売春に走らせた精神的な素質は遺伝するか否かという優生学の実験台とされる。

アルラウネは遺伝と環境の影響関係を見極めるために修道院の寄宿舎に入られるが、いたずらの限りを尽くしてシスラゴラの干からびた人型の根とアルラウネの艶めかしい生身の肢体の対照的な姿が博士の妄想のなかで重なる場面などは、銀幕から放出される妖気と色気に悶絶しそうになる。

テン・ブリンケン博士も、マッド・サイエンティストのフランケンシュタインと、自ら作った美しい彫像と恋に落ちるピュグマリオンをかけたような強烈な人物である。博士を演じるパウル・ヴェゲナーは一癖も二癖もある怪優で、人造人間ゴーレムを演じ、監督したこと知られている。この疑似親子のあいだに漂う性的緊張感、ほぼ一世紀前のサイレント映画とは思えないほどビビリしている。



右：神聖ローマ皇帝ルドルフ二世(1552~1612年)が所蔵していたとされる雌雄のマンドラゴラ  
左：19世紀に収集され、オックスフォードのピット・リヴァース博物館に展示されている偽マンドラゴラ(イギリス、2018年)

## 「妖花アルラウネ」

原題：Alraune  
1928年/ドイツ/白黒無声映画/ドイツ語中間字幕/108分/DVDなし  
監督：ヘンリック・ガリーン  
出演：ブリギッテ・ヘルム、パウル・ヴェゲナー、イヴァン・ペトロヴィッチほか



博士の家に伝わるマンドラゴラ(「妖花アルラウネ」より)

ターたちを困らせた挙げ句の果てに男と逃げ出し、サーカス団員になる。博士はこのやんちゃ娘を連れ戻し、自分の娘として社交界にデビューさせるも、その妖美に魅せられ言い寄る男たちを遠ざけ独占しようとする。一方、博士の観察記録を盗み読んで自分の出自の秘密を知ったアルラウネは博士を憎み、報復としてあらゆる男たちに色目を使って博士を嫉妬させたり、惱殺的な上目遣いで誘惑しておきながら拒絶したり、ギャンブルで財産を失わせたりして、次第におとしめてゆく。最後には、人としてのまっとうな生を求めて博士の甥とともに去り、博士は孤独と狂気のうちに残り残される。(原作の小説では博士は首をくくり、アルラウネは最終的には発狂して屋根から落ちて命果てる。)

## 自然と反自然の境界

映画の見どころは、なんといってもブリギッテ・ヘルムが演じるアルラウネの魔性の女ぶりである。ブリギッテ・ヘルムといえば、前年に公開されたフリッツ・ラング監督の「メトロポリス」で、労働者階級の娘とその似姿に作られた機械人間の二役を演じ一躍有名になった女優である。「アルラウネ」でも、白黒映画だからこその立派な演技で、この世ならざる妖艶さを醸し出している。特に、マンド

原作においてアルラウネは「自然に反した」(Wider die Natur) 実験の結果生まれた、一種の「化物」(Zauberwesen) とみなされている。しかし、人工授精は今や広く受け入れられた生殖補助医療技術であるし、死後生殖もさまざまな倫理的・法的論議があるとはいえ、技術的には可能だ。時代とともに「自然」と「反自然」の境界が揺らいできたことを実感させる映画でもある。



# 甘い香りは「甘い」か

さんじょうにし ぎょうすい  
三條西 堯水  
香道御家流 23 世宗家

香道は香りを記憶し鑑賞する芸道である。その記憶・鑑賞の対象は世界的に希少な沈香をはじめとする香木である。

香道では香木を六国と称し、その香りにより6種類に分類し、伽羅、羅国、真南蛮、真那賀、佐曾羅、寸聞多羅という名称でよばれる。これら香木の香りの特徴は五味といい、味覚にたとえられ、六国それぞれに当てはめられる。五味は具体的には甘・辛・苦・酸・鹹となる。六国の6種に対し五味は5?と、誰もが疑問をいだく。残り1つには無が当てはめられる。無というときまた疑問が湧いてくる。無から想像される香りは無臭。しかしこれは香木の話、そもそも無臭の香木などという自己矛盾の物がこの世のなかに存在するはずもない。じつは無は甘・辛・苦・酸・鹹の五味をすべて混ぜ合わせた香りをいう。まるで光の三原色を混ぜ合わせると白色の光となるような表現方法だと感心してしまう。

この六国と五味を合わせ六国五味という。この組み合わせは古来より師から弟子への伝授のひとつとして取り扱われてきたが、情報化社会の現代では少し調べると、すぐに詳細を知ることができる。香道の体験・修得を志す人は初期情報として、この六国五味を事前に調べてくる人が多い。しかし香りはインターネットととても相性が悪い。そこに出てくるのは単語としての甘い・辛いという情報のみである。このとき、人は自分のなかの甘い香り、辛い香りを基準に

せざるをえない。実際の香席に入ると、「ネット情報で辛い香りと書かれていた香木がくるはず」と緊張のなか、初めて香木の香りを聞く。「おや?」「あれ?」と疑問をもつ間もなく次々と香炉が廻ってくる。辛い香りが来るはずなのに、甘い香りばかりとを感じる。よくわからないまま答えを記述し、答えが発表される。自分が甘いと感じた香木が、ネットでは辛いとなっていることがわかり疑問が大きくなる。何度も繰り返すうちに自分の鼻が悪いのか、自分は向いていないのかもしれないと思うようになり香道への興味がうすれていってしまう。

五味について大学生に講義をする際、「甘い香りと聞いて思い浮かべる物は?」という質問をする。その答えはチョコレートや生クリームなどのスイーツから、薔薇や百合などの花、香水や石鹼などさまざまに多岐にわたる。昼食前の授業ではその答えが食べ物にかたよることも一興である。

さてこの五味は江戸時代に言われ出した概念である。当然チョコレートや生クリームは当時の日本には存在しない。そう、もし五味を参考にすれば、少なくとも江戸時代の人びとの香りの感覚を思い起こす必要があったのである。

香席に参加する際は、余計な情報を調べることなく、純粹に香木の香りを楽しむつもりで参加していただきたいと思う。



『月刊みんぱく』は  
国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)

[https://www.senri-f.or.jp/minpaku\\_associates/](https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/)

月刊みんぱく 2022年9月号

第46巻第9号通巻第540号 2022年9月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 三島禎子(編集長) 池谷和信 上羽陽子

岡田恵美 中川理 吉岡乾

制作・協力 公益財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



月刊みんぱく

2022年

9月号

編集後記

海外や国内各地で仕事をする人が多いわれわれは、さまざまなことばに出会う。調査地では、その土地の人びとの心理に踏み込むまでにことばが上達しないせいか、わたしなどは道具と割り切って現地のことばを使っている。それに対して、幼いころから家庭や学校で慣れ親しんだ日本語では、ことばは思考や感情を伝え、人の心理領域に大きくかかわるものだという認識がある。

かつて、日本語しか使えない女性が、セネガルで子どもたちに日本語で絵本を読み聞かせていた。子どもたちは毎日女性のところを訪ねてくる。そこにあるのはことばの意味ではなく、場と音を介した共感である。共感なく道具としてことばを使っていたわたしはずいぶんと考えさせられたものである。

他方、本号の特集では、ことばとは何かということ、人の身体の機能、人と自然との対話、人工的な声、人の心性にかかわる方言などさまざまな側面から知ることができた。

まだまだいろんな疑問が湧いてくる。秋からの特別展では、ことばとの個人的な体験をいろんな角度から問い直す発見ができるだろうと期待している。

(三島禎子)

次号の予告 10月号

特集「モノから見る海の暮らし」(仮)

国立民族学博物館  
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

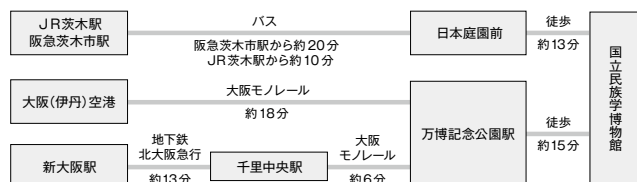
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)  
年末年始(12月28日~1月4日)



主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>





国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

# 新作オリジナルグッズのご案内

オリジナルグッズにフローティングボールペンが新登場！

絵本作家の岡島礼子さんのイラストで、

現地調査員が世界を巡ります。

ご来館の思い出に、大切な方への贈り物に。



## フローティング ボールペン

ペンを傾けると、オートリキシャに乗った現地調査員が世界を巡ります！コレクションアイデムとしても人気のペンです。

軸色：オレンジ、グリーン、ブラック  
インク：EU製（ドイツまたはスイス）  
ウォータープルーフ 黒  
0.8mm径

各990円（税込）



## 世界のありがとう スタンプ

世界の「ありがとう」をスタンプにしました！22種類のことから、どの「ありがとう」を選びますか？

各528円（税込）



〈オートリキシャ〉



〈マイルポスト〉

## フィールド・ノート

みんなの研究や登山家たちが愛用してきた測量野帳（ココヨ）の表紙にロゴとイラストを刻印しています。〈オートリキシャ〉デザインが復刻しました！

各500円（税込）

お問い  
合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

オンラインショップ「World Wide Bazaar」

E-mail [shop@senri-f.or.jp](mailto:shop@senri-f.or.jp) 水曜日定休

<https://www.senri-f.or.jp/shop/>



オンラインショップ



国立民族学博物館友の会機関誌

『季刊民族学』181号 ISBN 978-4-915606-82-3

## 特集 沖縄——今に生きる記憶

フェンスの向こうの故郷

山内健治

船乗りの島に祖先を

尋ねて

藤本透子

豚とともに生きる

比嘉理麻

現代沖縄のユタ

平井芽阿里

踊るエイサーから

魅せるエイサーへ

久万田晋

沖縄壺屋1938～40年

松井健

琉球紅型

兄玉絵里子

複数の沖縄、ひとつの沖縄

岸政彦

ミュージアム・ショップにて販売中

友の会会員価格 2,000円＋税

一般価格 2,500円＋税

今年は沖縄が日本に復帰して50年という節目です。沖縄の人びとの暮らしや信仰、芸能・文化をとりあげ、「沖縄の今」を形づくる人びとの記憶に迫ります。